

日本百將傳一夕話

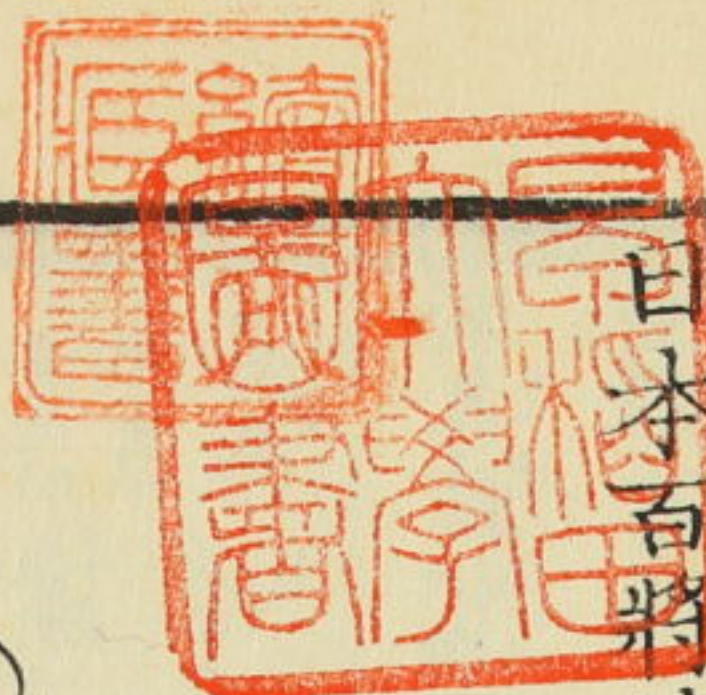
十一

~ 13
3566
11



門 13
號 3566
卷 11

半



日本書院
傳一夕話卷之十一

東都

目錄

- 源義滿
- 細川頼之
- 大内義弘
- 畠山基國
- 上杉憲實
- 細川勝元

松亭金水謹撰

傳一夕話卷之十一 目錄

○ 目

洋玉堂藏



- 山名宗全
- 北條早雲
- 三好長慶

以上九將 針

足利將軍尊氏

源義詮 正二位 大納言

義満 從一位 太政大臣

准三后 母法印通清女 法名道義

義持 從一位 内大臣 四代將軍

源義満

人皇百代後小松帝應永十五年薨 今安政三辰迄四百四十九年成

源義満者幼歲雄偉柳營之威權於
 是為盛近而内野之戰捷遠而筑紫
 之凱旋領闔國兵馬之政所謂鹿苑
 院相國是也

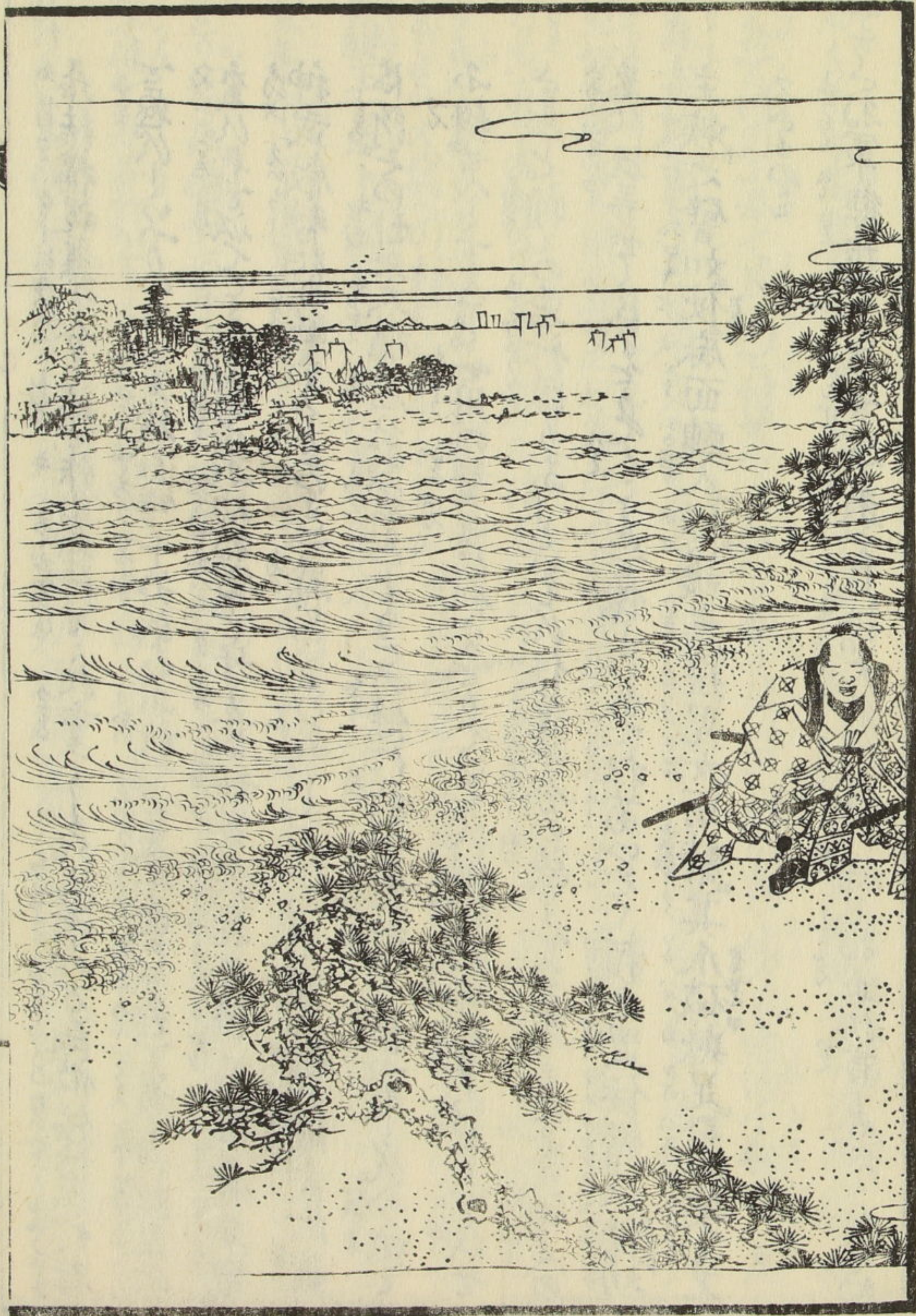
義満系師の礼を遊んで赤松則依が彼に奪る。此時年僅四歳之礼儀より飯洛の時兵
 軍琵琶坂のきの佳景を愛し。近侍に謂てのる。汝等らの地を早く奪て糸に輪一未は
 一しと衆をよその云の大あつて奇しくよる。後満童名春王麻呂

源義満の伝

二代將軍義隆薨りて、少子圓成、滿幼穉にして、母も父祖の眞衰と闘て、應安元年十二月、信長、大將軍に任ぜり。是の時、己未十一歳あり。執事頼之、先君の遺教を授て、幼君と輔佐し、天下を以て己が任とし、信長を退け、正人と進め、且文武の業を修て、左大臣の位に從容に居りて、匡一導老と教ひ、練めて、納め、謀と事と、まこと賢老の人とて、其衣を服せ、袴を著せ、大小刀を横へ、帯を以て、佛像の若に似たり、名を信長と稱せ、童坊といひ、其河津と稱ひ、佛、福、信、媚、妄、言、詐、傲、宮中の佛、御上、慶、諸大名の爲に、亦不玩侮せし、以て、笑ひて、まはり、まはり、満とて、信長を疾まめ、と、秋、之、故に、諸士の、後、信を、事、老を、謂て、侍、童坊といひ、因て、人、まこと、とて、耻しむる。

按るに、後、太平記に、まこと、執事、頼之、慶、諸、慮を、願、けり、ひ、九、七、歳、以て、能く、腕、の、禪、俣の、智、極と、以て、極と、拔、工、匠の、方、あり、然らば、惡と、以て、惡と、除、入、針、不、好、以て、信

坊と名付て、法、師、六人、と、作、り、太刀刀、衣、袈、異、袂の、袈、未と、著、せ、種、の、惡、行、と、作ら、せ、り、一、番、小、本、河、津、陀、佛、清、紅、梅の、羽、織、小、尺、餘、りの、太刀、を、帯、く、二、番、小、隨、河、津、陀、佛、野、狐の、皮、羽、織、を、帯、て、朱、鞆の、大小、を、佩、く、三、番、以、波、利、河、津、陀、佛、虎の、皮、の、袖、を、羽、織、に、履、斗、付、鞆の、太刀、を、佩、く、四、番、小、高、河、津、陀、佛、佛、純、子、の、羽、織、小、五、尺、斗の、太刀、を、佩、く、五、番、以、照、河、津、陀、佛、大、紋、付、る、白、綾の、羽、織、小、青、漆の、太刀、を、佩、く、六番、以、觀、河、津、陀、佛、表、紋の、羽、織、小、程、佛、の、袖、を、付、程、皮の、袴、を、著、り、けり、この、六人の、惡、僧、も、日、洛、中、洛、外、小、佛、御、上、尉、を、怒、り、一、道、路、に、勝、て、種、々、様、の、惡、行、を、作、り、て、限、り、なく、然、れ、ども、天下、以、免、の、信、坊、まこと、人、まこと、中、で、用、て、を、通、り、けり、或、時、大、名、も、家、を、偏、ひ、虚、を、以、て、種、々、佛、佛、を、信、媚、と、稱、く、或、は、酒、宴、九、杯、に、交、り、狂、言、癡、興、醉、狂、種、の、戲、を、以、て、まこと、まこと、大、功、忠、義、を、採、め、武、勇、を、好、む、武、藝、と、稱、し、進、從、賄、絡、を、撰、一、諸、候、太、夫の、俸、祿、を、み、衣、類、金、銀、を、所、を、一、本、帯、と、稱、す、家



百將傳古今卷十一

〇三

群玉堂藏板



義満幼穉
明石の
景を愛は

源義満公

百將傳古今卷十一

群玉堂藏板

關西何と日清平ありと。初領之小軍後多。同七年。育小等。後滿躬大兵。帥以西
 心仗の爲出馬あり。從大各。午九人。その勢。十方。誘。し。ま。え。け。り。兼池武政長。及。小。出。渡。し。
 系女。の。先。降。赤。松。兩。將。と。敵。に。進。討。け。し。で。衆。寡。懸。絶。せ。り。と。敗。れ。し。大。宰。府。に。據。り。又。高。良。
 宗。珍。も。然。と。も。將。軍。の。武。威。大。小。衆。の。九。州。大。方。降。け。し。初。領。之。小。軍。後。多。り。第。
 寇。と。稱。す。る。と。今。武。政。必。死。の。兵。に。以。て。要。害。に。捕。獲。は。力。を。以。て。攻。ん。と。せ。り。兼。池。を。以。て。
 兵。で。勞。せ。ん。熟。想。す。不。已。不。免。と。健。と。備。め。九。及。の。民。人。を。撫。育。す。有。功。と。封。す。仁。と。布。及。に。
 願。ひ。と。功。多。く。入。り。と。高。王。所。と。班。と。之。苗。降。す。所。以。今。の。策。に。稱。す。と。兼。池。國。守。
 つ。降。ら。ん。と。や。守。郎。宗。珍。と。經。と。も。九。及。の。士。意。を。固。じ。惣。民。君。の。仁。德。小。懷。ぶ。彼。が。
 單。管。の。志。地。指。て。莫。く。煩。ひ。と。争。ひ。け。り。と。將。軍。之。を。諫。と。容。と。同。向。と。伴。東。大。和。守。
 祐。弘。小。堀。の。大。隅。降。す。と。清。津。清。之。小。堀。の。筑。前。肥。前。と。少。貳。小。授。け。廿。門。豐。本。と。大。内。
 氏。弘。小。堀。の。後。と。大。友。氏。繼。小。興。ふ。と。他。功。と。賞。し。忠。と。擇。ひ。賜。賞。悉。く。願。ふ。と。同。因。て。西。

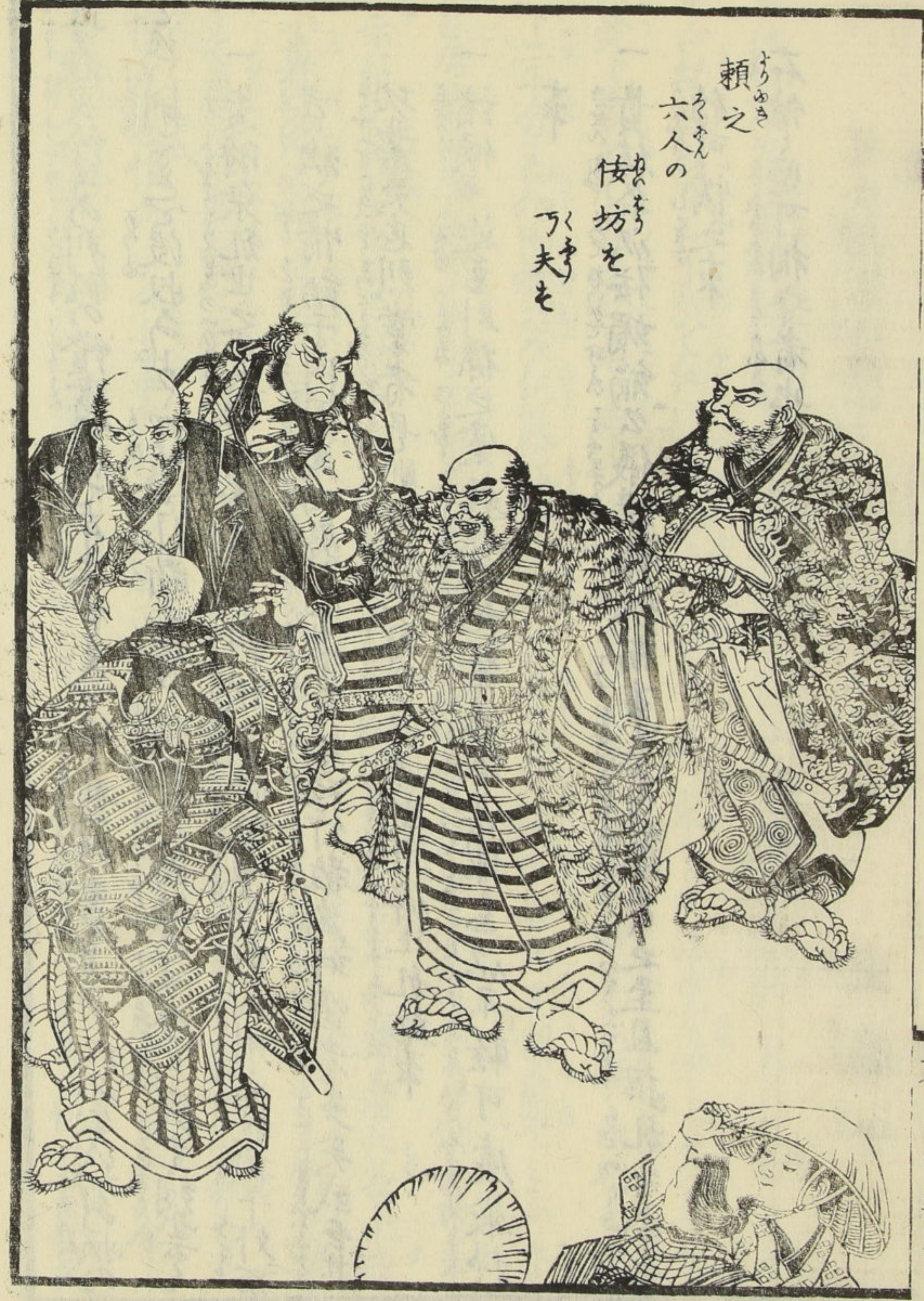
及。書。平。ら。ん。と。兼。池。に。奉。り。ね。し。兼。池。と。み。る。若。更。小。多。一。族。孤。單。と。守。る。の。と。小。
 於。て。稱。之。書。と。遣。し。兼。池。小。和。降。と。招。き。清。武。政。去。教。相。強。と。兼。池。平。ら。し。け。り。
 因。て。將。軍。所。と。班。兼。池。と。肥。後。小。堀。の。將。軍。後。滿。躬。降。し。と。い。ふ。是。利。氏。の。武。威。全。り。て。
 南。朝。の。兵。多。目。に。衰。弱。の。武。士。競。つ。て。幕。府。小。朝。せ。り。翌。年。改。元。あ。り。て。永。和。と。い。ふ。の。
 年。後。滿。躬。始。り。天。皇。小。禰。十。月。從。二。位。小。叙。以。二。年。七。月。是。利。氏。冬。勢。の。堀。に。降。と。清。
 兼。池。滿。躬。と。石。見。小。堀。と。四。年。育。室。町。小。郎。と。構。多。く。名。花。と。裁。ら。し。と。人。稱。し。と。兼。池。
 所。所。と。い。は。し。り。室。町。殿。と。稱。せ。り。と。の。年。後。滿。大。納。言。に。任。じ。右。大。將。と。差。て。從。二。位。に。叙。
 せ。り。夫。より。後。康。曆。二。年。後。滿。從。一。位。小。叙。以。永。德。二。年。後。滿。左。大。臣。と。り。右。大。將。の。如。
 し。已。不。い。左。大。將。不。轉。と。藏。人。所。の。別。業。小。禰。一。輩。の。名。を。以。て。許。さ。し。と。の。年。天。皇。讓。位。
 あり。皇。太子。位。小。即。く。と。是。で。後。小。松。天。皇。と。い。ふ。上。皇。改。と。後。中。に。權。を。左。大。將。後。滿。兼。池。
 別。業。と。い。ふ。永。德。二。年。正。月。白。馬。の。節。小。堀。後。滿。小。堀。と。内。膳。と。い。ふ。同。月。後。滿。と。以。て。淳。和。



百将傳

八

群臣堂藏板



頼之
六人の
佐坊を
引夫を

群臣堂藏板

群臣堂藏板

亦不迫孫平次兵衛盛政しつりの弓箭の放実不精しく且文學に闢て書將を人
 亦小世人も多碎るとりて我獨理うりて浮世で悟り髪を薙て續々の國府不整し
 且算書と友とて閑清小送は道人あり春ハ筆單の醜と袖巾で緑樹の下に碎しと進め
 秋ハ紅葉の林と進て薄衣に綿と發秘范蠡が五湖の樂と許由が箕山の安を
 慕ハ濁世の塵と遊て在しと頼之つて早馬と馳せこまて糸陣不送けり空を踏めり
 固く禱と更にその徴に應ぜま然ととも權使節再と小方とどりて今ハ禱まる小廻
 みる糸陣小より將軍の獨しとありては所範とあるこま不固て諸君の名傷復其の傷
 俚英才雄智の武士も地未つて洛中に充滿し傷書兵出と現しと老若若後也と
 貴と文武の徳と慕ひつ天下の風俗一時不変せり其小も自傳の機功不ありかて
 應安に年秋八月月満新亭と開て月見の宴と興せり庭小五色の砂と時ハ月白砂
 小後ハ眠とる糸小珍樹花木と植ま蘭ハ夜の風小香と吐き紅葉ハ月の前小散樂

以その夜の西風暮雲と拂ひ寂しく朗々と世界一般畫の如く染山の崖に及橋と
 架け高欄に倚て巻き水晶の玉と加さる夜光の珠も何れも天上の月此所不碎け墮
 るると怪まる高亭の床少の香炉と並難香の沈み種々の名香教と盡して煙きあ
 る香煙四方に散満して羽がぶるに風薫り浮香世界に入るが如く折その夜の宿客
 前園白段基と以下月卿雲客も集り既近外様の大小名ハ板橋に踏踏し他の
 汀小敷伸る紅緑の毛氈小坐をて洋とる酒散ハ最美と盡し善と竭せし珠膳
 管應筆紙小方とさくもあひま下後滿碎不和月小宗とて起て舞ふ頼之進え物
 軍の袖と扣て君ハ天下の武將小備とて四海の大器と任しと然るは今の種忽ハ
 更小人主の行不わびりや碎中の興とも練めざらあさるはと面と冒しとひけとバ
 滿赫然とて席に就くと小放てその座をけ公卿も程多く邊にありと諸候も後きて退
 去せりかそ後滿以為我道碎小宗と興不固て威儀と失ふ練の六橋可と然ととも諸士

のころより青雲達官の席でも厭ふ我と面影小辱むることも元徳の終りに夫より頼之
 と味つけ頼之とて使て大小忠と疾ひと称して頼及小誓居せり。後満大小終り
 るに赤松則祐とて遣ふて系師小招き遣ひ頼之洛小停つて再執事に補ひ成
 ひ小傳ふ頼之執事とて遣ふ。威權を重く。幕府を軽んず執事と重んず頼之
 屢々として患ひ我威を壓へ後満の威を憚るが為後満と計つて叱せり。頼及小誓居
 り。天下とて後満が武人の威後を知り。再び出て執事に補ひとのり
 按るに是等の権謀多き小由あり。昔 延喜帝の朝諸臣者をして極め衣
 服冠帯を美多の因て質素の命下はしむるも。積年の弊猶更甚なり。一時左大
 臣時平美服して朝に。帝とて覽て大小叱り時平退きし門で因づ。小放て
 群卿百司忽忙鹿服になりぬ。是より。帝と時平と相計つて然るを
 かく。康暦元年閏四月。執事頼之を遣ふ。老あり。後満とて信多し。大館氏信二

階雲氏行松田丹後守と頼之が彼に遣ひ。穢と罷て後及小誓居せり。頼之今と奉
 一氏族と引て後及小赴入り。時小頼之の従弟細川業氏馬と扣て説く。貞治
 年中より貴家の一族京都の警備とありて君と守護し。四十年來の争亂一計小定り
 海内太平に飯と枕と高らん。と極めて唯功を公が賢佐の徳と之と。且一家の勲
 績に在り。然るに君佐に依り。功位と棄直長と叙ふ。衆多くと配流小處せり。是
 何と謂とも。夫君臣の義と以て。今大樹義を。豈公臣道とて守ん。何ぞ氏族と
 集め。黨と結んで。幕府を祀へ。後人として。その罪を明らめざるや。と憤り。と會ひ
 け。頼之。頼之。従容とて對てのり。我素より君恩の厚き小由あり。と
 東の嶽に備り。方は小よとて。是氏族の系業。隆と隆ひ。と君恩の厚き小由あり。と
 今祀とす。と後人の為に。重科小處せり。は。も。更。小。君。の。邊。に。あ。ら。び。思。ひ。て。堅。小。誓。の
 符。天。遣。俄。に。臻。り。人。を。早。く。背。く。に。因。り。我。彼。下。惠。の。點。を。更。に。その。色。を。更。に。誰。の。人

百將傳一公記卷之十一
 〇十
 詳 証 據 載 反

配所小居て行さきの選でしと縦ひ君若くはとも争う臣道と礼さる我更に罪ある
 の身深く後後の許しあさ悪む昨日の公の傍に在て柳管羽翼の長くあり今日遠
 及不放さして苟苟の士とて古今移じとすに足らぬ汝再びのささるとして
 諭けし六業氏中にて喋り頼之今日利髪して法名と事久し馬一族と俱小獲に赴く
 按るに後太平記小頼之強及不整居の後四本の總轄とありんて欲し作縁の
 何野通也と高外本の城に責てうち滅し自互之總轄とありんて必と必と必と
 偽説ありん後太平記とての説齟齬とて其偽定ありんて必と必と必と必と必と必と
 年に至り山名之札起り内野合戦の必前細川事久と河原より召し政事と委
 ねたる子頼之と斯波公將を代へ管領とくある時ハ暴行自之の不義ありん
 くと大頼之浸潜虐殺の災に逢て君と憾をなせしより答て引て臣道と守は
 四海の握り入てより以降救世の執り唯頼之一人也先哲の神すとて致さる

大内義弘

右内帝 應永六年十月戦死
今安政三辰迄四百五十八年成

大内義弘者姓多々良氏鹿苑相國之將

也明德之乱有力戦之功又諭南帝調

和睦之儀又攻西州作乱者平之其後謀

逆戦死于泉堺應永年中也

百濟國公孫王孫
 三郎子琳聖太子
 七世正恒始テ多々
 良姓ヲ賜ヒ大内
 ト號ス正恒十六代
 弘世 周防権
 弘世 從五位
 周防長門石見守
 義弘 左京大夫
 從四位上
 法名佛実
 持世 修理大夫
 從四位下
 教弘 周防権分

義弘一世の成功寡く其因て重く用わらるる官禄ともは進まざりしを思ひ
 ざるのてはより叛く身と戰場に失ふ量歎せざるや南北は和平と誓へ天
 下の煩は二時に恢復せん其功の大なるのといふ

大内義弘の事

孝安の百濟國琳聖太子の後あり。宣居元年辛未太子夢の占を以て舟を裝ひ彼を
 の百官百司とて舟に帆帆に任せ空海万里を渡きて。同年二月周防必依波郡多々
 良の漢に葉きけり。國司を以ててあつて。奏聞に及びけり。推古天皇の詔に
 長門の至大内の縣に假小宮室を營之琳聖太子を遷く。始め若岸せ。漢の若くは多々
 良の姓を始め宮室を營めり。地を以て氏とて授けり。小内在大内とてその子正恒と
 八代小内あり。周防介登房の子弘登その嫡満登の世より武家とあつて。元暦のれに右太
 家入。西海に軍功あり。その愛して長門に遷り夫より二代の周防介弘貞交
 永十年惟康親王の時百濟の兵を招き國東を攻め。後弘于時執權北條陸奥守政
 村周防の命を信じて和をも。その後正壽院道階入道弘世の北の方、小松幸の國母と
 あり。統御百官拜趨の終焉と盡し。圍繞渴作流る。及び終末其身國を併せ總て二箇國

の大守し。周防に城郭を構へ系所とて小内とて是を依國清水北野愛宕山盡
 く遷せり。その子左系大夫弘小幸は太祖琳聖太子より世系下二代小幸とす

附てのこゝの所は後太平記の祝多し。いとも彼書に多く杜撰と説かれて取捨
 の看する人の思ふあり。就中周防介弘貞の時百濟の兵を招き鎌倉を攻めし。こゝ
 まで弘世の北の方、小松幸の再とて。更不疑ひる。小幸は如何を以て後世に
 かくて明徳二年十月。右陸奥守氏清播磨守満幸が。後功以募りて。播磨暴行を
 の。國司を以てて。院司日野中納言の。下司とて。遊ふ。將軍を満大不憤。満幸が。雲及の守
 繼て改易し。洛で遊ひて丹波に放り。因て満幸大不憤。氏清と勅めて。兵を起し。わ
 系所を攻撃し。人々を不。放て。前執事。細川幸久。及び頼元。高。基。國。今。川。後。紀。色。詮
 範。斯。波。義。重。大。内。義。弘。佐。木。高。明。赤。松。俊。則。等。と。召。て。軍。東。を。發。し。兵。を。信。吉。の。浦。小
 構。賊。軍。進。と。て。是。れ。對。以。滿。幸。を。山。陰。道。七。箇。國。の。兵。五。千。餘。誘。ひ。て。公。の。雲。小。陳。し



百将傳二話卷下

〇五

洋正堂藏板



百将傳二話卷下

洋正堂藏板

氏清の先鋒と名上統分後數が弟小林修理亮を誘て營進んで大官に至るとも。義
 弘力戦と連りた破り修理亮が傍小進む小林自ら勇と揮ひ大内が兵と捲く大内が
 兵敗を以て弘を牙と爲し戦と掛て小林にさうあひ挑と戦ふ。午餘合。竟に修
 理亮が首と獲る。こ小於て大内が軍勢大内周りと驚くを。後數の旗と棄面を捲ひ
 系兵に捲く。小内軍と窺へり。然れども富田某松澤左馬公等と知る。取圍と之を
 殺す。賊軍の多く及て去る。下滿幸が先鋒及氏清が二陳二陳縣の版と記すが。従
 横に蒐まは。富山某國精銳と進め。逆ひ替て時と逆し。屢と双の功と顯ひ夫より開戦
 入札と或ひの逃ひ或ひの逃き。滿幸が二陳土屋播磨守進兵と行て必死と究む。勇銳一以て
 千小まる細川幸久富山某と陳と列後ととて防ぎ土屋と少て討死ひ氏清はて大内怒
 り。自勇兵と勵まして。連に系師に札入を。赤松長則大内長弘防ぐ。と利と去る。氏清勝

小宗て威威と張は。お軍味方の敗すとて。今川佐木と富樫細川富山斯波沢川荒
 川土橋仁木大友清澤武田小笠原等。とて小隊分とて。八方より襲て蒐る。その勢
 由雲霞の如く。岡の声矢叫びの青乾神ととて。為に急動。山嶽ととて。為に復る。と名
 氏冬同滿氏同七弟。各氏清。大内懼とて逃亡。餘軍も去る。及札を。氏清僅小百騎
 と餘ひ。こ小於て戦力竭き。一色滿範と戦ひて。氏清こ小討とて。

傳小云く氏清の弟小林修理亮の。藤原の士。姉め。屢誅むと。可ひ。脱れ軍を
 發するに。及び氏清世に對して。我今八幡小陳する。と。源氏累代の宗廟。と。神
 具我軍に。其。賊と替て。草創の功と述に。さる。及。の。備初。の。如く。さ。及。以
 て。管領。と。さ。入。と。小林。は。て。大。小。哭。一。悲。き。さ。君。の。と。幕。府。累。代。の。大。臣。光。代。と。大。恩
 と。懐。き。數。及。不。候。と。る。其。の。小。の。大。恩。と。忘。と。殺。さ。と。君。と。替。ん。と。り。神。明。真。為。力
 と。副。人。や。は。自。恩。小。と。誅。む。と。と。も。容。ら。ま。は。脱。小。隊。の。馬。に。及。一。と。の。時。小。ま。り。争。ふ。

どく徳士と傳へて藤小公初て應永五年に至り朝鮮来貢の事ありて。故國の使の補教ある。老種との寶物と齎し來は。將軍家弘をて。こと小應務せしむ。小美弘かの討討と受用を。この系師小傳けしむ。管領四職の面々弘我者に募はし。藤る。

按るに斯波細川島山の子氏より。小不仕とて。其時とて。二管領と稱し。山名赤松一色赤松の四氏更々侍討の司小補せしむとて。ことと四職と稱し。一より

義弘怒ると會じり。竟に及きて泉抄河の界小據て。極と稱す。主波宮内少輔詮重及。山名氏清父子山名満氏周七郎等。こと系極五郎左門とて。小應下と美濃丹波近江。系小旗と奉ぐ。是小依て系師の將校とて。下と混雜し。將軍家終る。きのひ。寺後極系小美濃。て代り。ゆへ木高範小進とて。征は丹波の兵士小不若とて。攻む。將軍躬八幡小藤。山名基五郎。波長。細川頼元等。和泉小進。弘とて。攻む。詳致日とせぬ。わぐ。細川満元。誅慮に因て。弘城小大と稱す。事致して。尾張守満家の基國。が為小討とて。り。

畠山基國

辛年未詳義弘退治の軍功應永六年ヨリ
今安政三辰造 四百五十八年辰戌

ハタケ ヤマ モト ヨシ
源家國 尾張守 海部大捕

ハタケ ヤマ モト ヨシ
中大内義弘叛據泉堺基國往攻之

ツヒニ キル ヨシ
遂斬義弘

上の系系にのり。奉入。源氏也。是利の氏族之。終るに。山名重忠が妻。右衛門尉。遠元が女。重忠に嫁して。小次郎重秀と生む。元久二年六月に。妻つて。重忠。老の為。小徳念の討。とて。武具二俣川に。戦死。重秀も。三所に。死す。夫より。その女上。徳念。義弘に。嫁して。生む。義純。故あつて。母方の氏を。冒し。し。

百將傳 一公前卷 十一

五六

洋 五堂 藤村

足利上總介義兼
宗領 畠山遠江守
從五位下 義純
五代之孫
源家國 尾張守 海部大捕
國清 阿波守
關東執事
義深 尾張守 三郎
基國 右門督
法名 徳元
満家 左門督 從三位
法名 道禪

畠山基國の治

其名世小くわらむと云ふも將軍家の民族さなり。斯波家細川家の列小ありて。管領と稱せざる。但一山城の守護と稱さる。山名氏清満幸若小叛きて礼を犯。既小降小礼入。一時細川幸久等諸將も俱小出陣。山名滿幸が千餘騎内野。小殺ひ来る。幸若路を遮つて殺ひ満幸が先鋒伴田波多野。河原石原津原等と力戦。と敵を斬り屍ハ行路を塞ぎ血ハ草野を浸す。小至は千三陳多土屋が兵必死で突め大。小勝勢。基國が兵前後小還り。左右小出て血戦を圍て土屋を討死。賊兵竟小殺れ。氏清殊小依まはらり。幸若とひ侍も是より後大内後弘礼と京の堀小起す。基國一色。雷祭。鬼神の如く世人の心とて彼は弘弘。其陳頭小討取。六。基國の子満。功の才と云ふ。その後孫倉の管領持氏氏憲が孫叛小。目孫倉ををり時將軍の命。小。敵中の勢を卒て。氏憲を攻滅。持氏を孫倉小降。是等の軍功あり。

上杉憲實

卒年未詳。永享十一年剃髮。今安政三辰追四百十八年成。

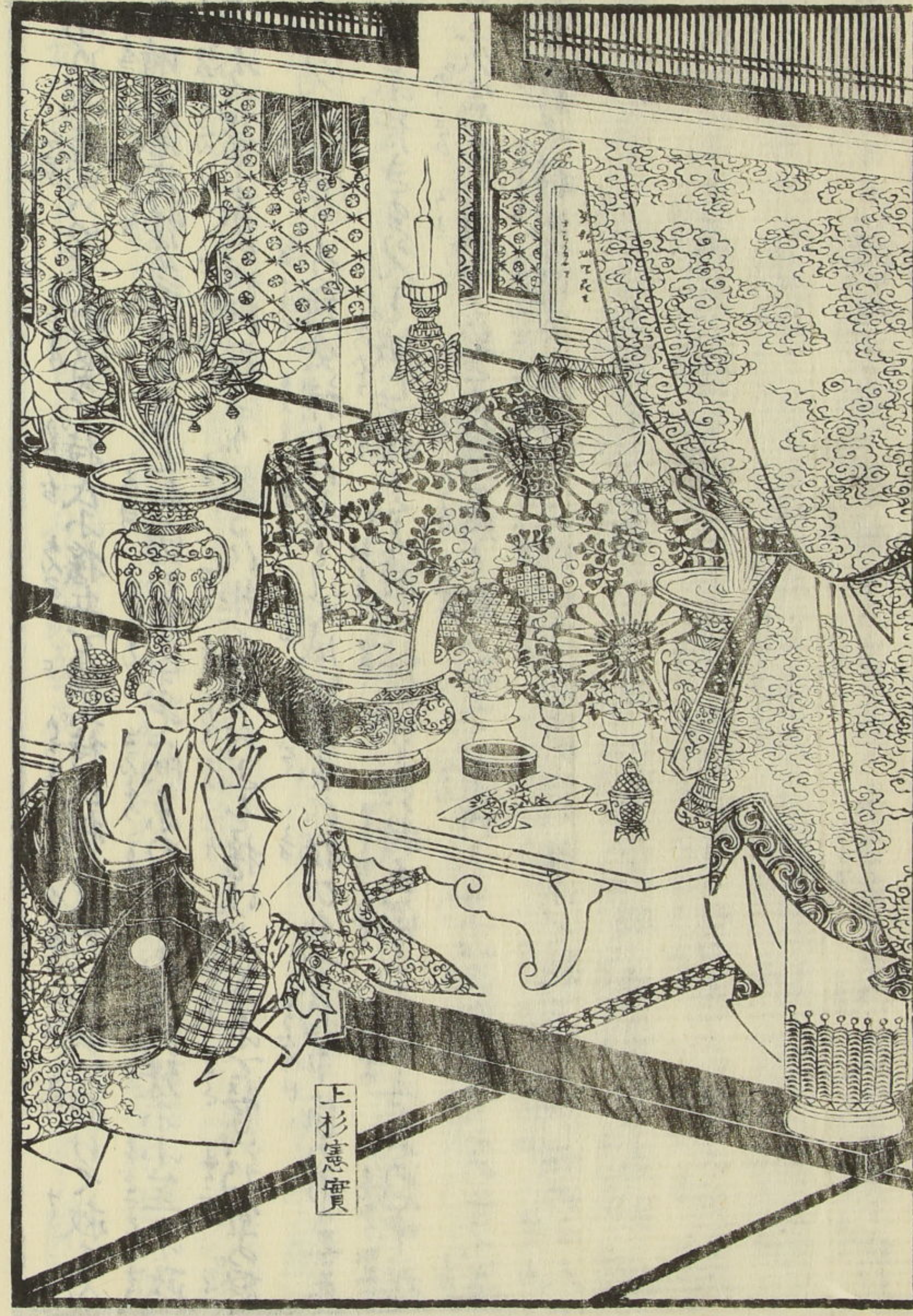
勸修寺庶流
上杉左衛門尉重房五代
藤原憲方 安房寺
憲定 安房寺
憲基 安房寺
憲実 安房寺
憲忠 安房寺

上杉憲實者鎌倉管領之重臣也將軍義教之時持氏有自立之志憲實數諫不聽而嫉之憲實密訴京師義教遣大兵攻持氏時憲實率兵未會持氏敗走其二子出奔結城氏朝迎之納之于城憲實從京軍圍而攻之有年氏朝遂戰死二子皆沒憲實嘗奇納五經正義于足利學校



詳極堂藏板

憲實此の
罪を責む
持氏の
廟前
自殺
せんとす



上杉憲實

井上

五

兵と集めて襲んとす。憲実は使て使て之。その罪を謝す。ついで持氏曾て許さる。一族の
勅め不仕せ。その傾城より上野の白井の城へまゐり。持氏桃井直弘及び一色直義とて
是と襲む。憲実が兵庫の清方兵を以て上武の界感納川に送らば。直弘直義敗
る。持氏一軍を以て。憲実一敗小利を得る。このも若君相争とて。駐兵人臣の道
小あはれ。自ら罪を以て自殺せし。決まると。後回一族を連りて。往々頼て。系所へ是
所ふ大樹大木。後さのひ上杉治部大輔教朝。中務少輔持房と。東心使とて。給
旨と請ひ。まゝ上杉憲実の清教とて。賜る。持氏逃討と令せし。持氏は。周章と
ま。蒲籠の賊と斬て。系所へ入る。その弟持貞及び。里見田中一色桃井。千原小山結
隊。命令。兵方餘人。率。上野の白井小寺。憲実今止と。海に謀計と以て。此
大軍。一敗。小寺前。鎌倉の兵敗。老若千之持貞。海に遁して。歸る。その年
十月。上杉持房。今川小左衛門武田赤松の五方。餘誘ふ。と。東海道と下り。箱根に陣

ま。ま。上杉教朝。七十餘誘ふ。と。北陸道と下り。上野小入り。憲実と兵と合し。く
鎌倉不入し。と。小左衛門八州の群士。持氏不叛。系軍に。加る。老若多。持氏之浦持
高。小鎌倉と守らし。自ら。武。海。老若。も。上杉。憲。武
臣相。之。州。の。兵。と。援。け。け。防。ぐ。と。憲。進。軍。と。早。川。原。に。敗。ひ。一。矢。不。敗。と。逃。亡。し。
教。朝。憲。実。と。兵。と。合。分。倍。不。出。張。せ。り。城。戸。滋。河。守。持。季。の。海。道。の。敵。と。防。ぐ。と。險。に。據
て。と。守。る。系。軍。進。軍。で。襲。んと。す。持。季。死。力。と。竭。く。拒。ぐ。系。兵。懼。と。て。陣。を。退。け。
屯。ま。る。と。五。月。に。及。ぶ。と。こ。小。浦。持。高。が。暴。れ。心。と。亂。し。系。兵。小。共。と。て。義。久。賢。王。と。責。む。
義。久。が。大。臣。里。見。仁。本。等。と。あ。戦。死。と。義。久。捕。り。と。鎌。倉。悉。く。焦。土。と。す。持。氏。今。の。力。竭
て。使。と。憲。実。が。陣。小。遣。し。先。進。と。悔。て。和。親。と。請。ふ。憲。實。少。し。も。拒。む。と。大。小。飲。び。と。鎌
倉。小。入。と。その。命。と。助。け。ん。と。上。杉。下。城。戸。持。季。の。持。氏。が。云。甲。斐。多。く。降。り。と。大。小。鎌。倉。連。に
自。害。と。勅。む。と。持。氏。種。族。と。難。難。せ。り。か。て。憲。実。へ。使。と。死。せ。持。氏。助。命。と。請。ひ。け。と。と。

將軍教罪て責てあつ小辨一のり毛。憲実奈何と由経方あり。鎌倉の永安寺に於て
 持氏終小自害せり。その子久由頼も亦殺以上杉憲重色直志。その除隠縁に共
 せ若盡く小殊せし。因て因東平宣小及び。徳士推て憲実て管領とせし。又とて。憲
 実曾て喜びま。君と殺まの賊あり。何ぞの賊と潰さる。と其弟清方と因東の管領
 して。その弟の利髪と長棟と号し。長壽院に赴き持氏の影前に於て自殺せし。其
 ともも瘰癧きとて。家人をことと押止。劔を奪ひ治療を加へ藤沢の道場小坐く。後小
 清寺に移り住し。病と困客と絶て。再び人々の下と棄とせ。是より後結城合戦小將軍
 の命下るといふ。釋して弟の清方に代らむ。と國史畧にの載りと云。

按るに足利學校の小野篁の建所。其人博學宏才にして。世小文殊の化身と稱ひ
 終小學校を管と孔子及び十哲の像と畫く。後世とて類廢して。下野長利の所を
 存せり。足利義兼堂社と再興。理具上人を招入る。後田孫とて。氏再興と云。

細川勝元

人皇百代 後土御門帝文明五年卒
 今安政三辰迄 三百十四年成

細川勝元者為源義政之管領山名宗全

欲立義親為大樹與勝元相戰于京洛

兩軍互數萬相持年久宗全病死義親

不得立應仁亂是也

或人勝元と評く。宗全義親極威小。勝元誓して教奉あり。行暴行
 て雖小。人怨と衆怒。其の時を俟て。諸候以親。天皇幕府小。請て兵と罷よ。

- 足利陸奥判官義
- 康二男細川二郎
- 義季五代
- 源頼元 右京大夫 管領頼文養子
- 滿元 右京大夫
- 持之 右京大夫
- 勝元 右京大夫 從四位下 武藏守
- 武藏守
- 龍安寺 号ス
- 政元 右京大夫 從四位下
- 澄元 右京大夫
- 高國 左馬頭 從四位下 右京大夫

新田天助義重
二男山名冠者義
範七代

源時義
師氏義子
ヨリ一家正統

時照
宮内少輔
右門督

持豊
右門督
法名宗全

教豊
右門督
教名宗全

山名宗全 年曆全

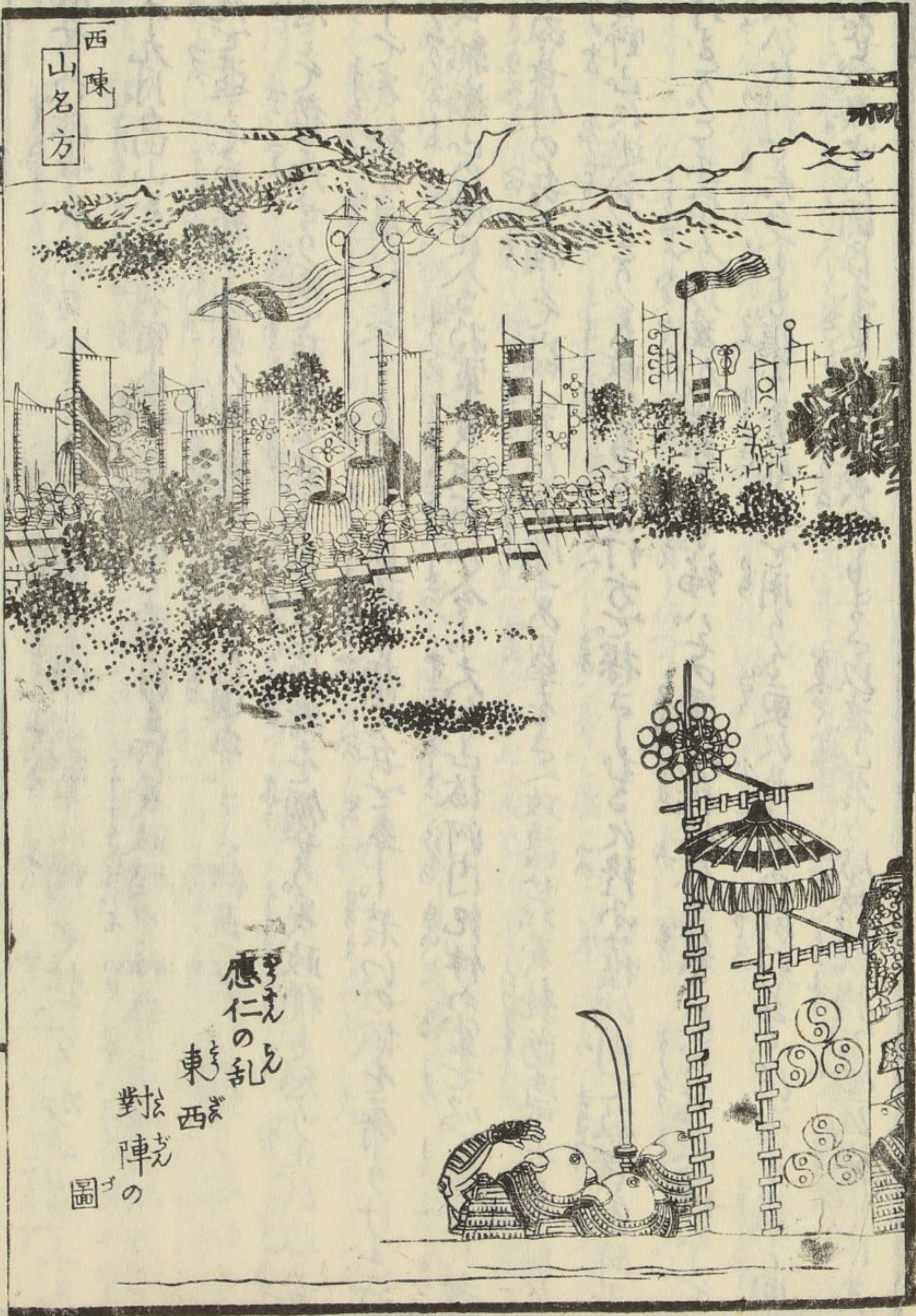
山名宗全者初名持豊嘉吉年中赤松滿祐
殺義教奪播州京軍進攻之持豊與諸將急
擊拔其城誅滿祐傳首京師義政之時宗全
入播州擊破赤松氏教祐則尚皆走死其後
與細川勝元相惡結黨聚兵而立于京中比
年戰爭互有勝敗應仁之亂是也

細川勝元 年曆全

細川勝元の事
時傳の使傳と改るに兩利ともれ足利家の氏族ありて義も勝元ハ宗全が婿なり我
と互に親睦を交し親小應仁の礼をなびて東西の勲者なり路中洛外を初
揺ト天子上皇と作り奉り杉家清華貴族の徒もも其勢の餘強に罹り万民
塗炭の苦しめり。こゝに保あがり軍家の嚴多るるを據り父ども其ハ勲者の我々に記
まりたるも勝元ハ才智衆小勝るなり。父安二年十六歳ありて管領職に任ぜり且
叔祖之の疑を逐て政道私あふりける。山名宗全ハその婿也。遂に赤松滿祐と誅。その
功を固て播磨と揚子尾より威勢積く意ハ宗全に在り。猶心に飽くや折
うハ管領の一家を襲て権柄と握らんと企つ。こゝに困て畠山直本をその長とする政
長と迎ひ実子と就ててその家跡を継せんと欲せり。其の理辭をかく。勝元と

商議して義就と退けり。政長と入ると徳本怒つて將軍に請ひ。ことと裁き入ると要まるとも勝元其まるといふ果さず。然るに勝元宗全と縁を推して政長と自由山の家督とせんとの義父ある徳本と相推執以固て洛中物忽し。名教之細川勝元兵と帥ひて幕府で衛勝元宗全兵と卒て。徳本が飯で圍む時不徳本が家人等も。其主の不義を疎と多る宗全に從ふより。徳本教示討しが巨兩物進とて徳本が飯を燒て焦土とる。徳本退して修裡大夫滿則が飯に入る。義就を方と来と没落し。徳本忠とて建仁寺の西末院に誓居り。政長の家跡を継ぐ。こふ於て細川勝元政長とて將軍家に得共とす。巨兩物が我とて怒りすと怒り。不徳で得て見入ると。勝元陳謝する。勝元を。家臣破谷某が所為と。謂て罪と謝し。將軍義政怒解て。政長を徴し。入。然るに宗全も。爲。擧。とて。情。を。摘。解。兵。を。以。て。誅。戮。を。令。之。の。人。と。言。え。け。且。勝。元。類。と。不。と。と。と。謝。宗。全。も。其。名。を。擧。固。て。捕。り。に。許。

又と宗全但馬に發着せり。是より高細川成之將軍家に於て奮功ある赤松の廢絶の満祐が。是より紀の。自業自得あり。の。ひ。か。と。ま。と。と。長。と。折。あ。は。と。る。表。さ。る。に。遠。回。宗。全。將。軍。の。勅。を。得。て。威。勢。擧。げ。り。の。時。と。過。ぐ。は。と。及。滿。祐。が。子。彦。次。承。教。林。の。逆。弟。彦。五。郎。則。尚。不。奮。勇。播。磨。を。擧。げ。入。と。頻。りに。嘆。訴。を。上。り。義。政。許。し。宗。全。が。領。する。所。の。播。磨。を。奪。ひ。彼。兩。人。不。其。人。と。い。ふ。不。能。て。教。祐。則。尚。播。磨。不。至。り。と。名。が。守護。大。因。頼。大。炊。火。等。と。夫。庭。に。迎。て。と。と。を。領。し。宗。全。頃。て。大。不。怒。り。兵。を。率。て。播。磨。不。令。赤。松。と。相。殺。ふ。教。祐。則。尚。敗。走。り。則。尚。の。備。前。守。自。殺。し。教。祐。解。及。の。北。畠。に。奪。居。宗。全。敢。て。是。と。許。さ。ん。ぬ。れ。教。祐。も。自。殺。せ。り。宗。全。是。より。洛。に。入。り。と。敢。て。その。威。勢。も。多。く。威。權。の。爲。の。日。に。十。倍。せ。り。と。と。と。康。正。元。年。より。是。より。高。山。義。統。系。教。を。没。落。せ。り。と。と。河。内。守。若。江。の。城主。遊。佐。河。内。守。國。分。の。是。と。逆。て。縁。を。巡。ら。し。和。及。に。兵。の。名。に。奔。向。し。政。長。と。屢。戦。ふ。將。軍。長。を。辱。す。の。巨。兩。將。軍。令。下。て。和。



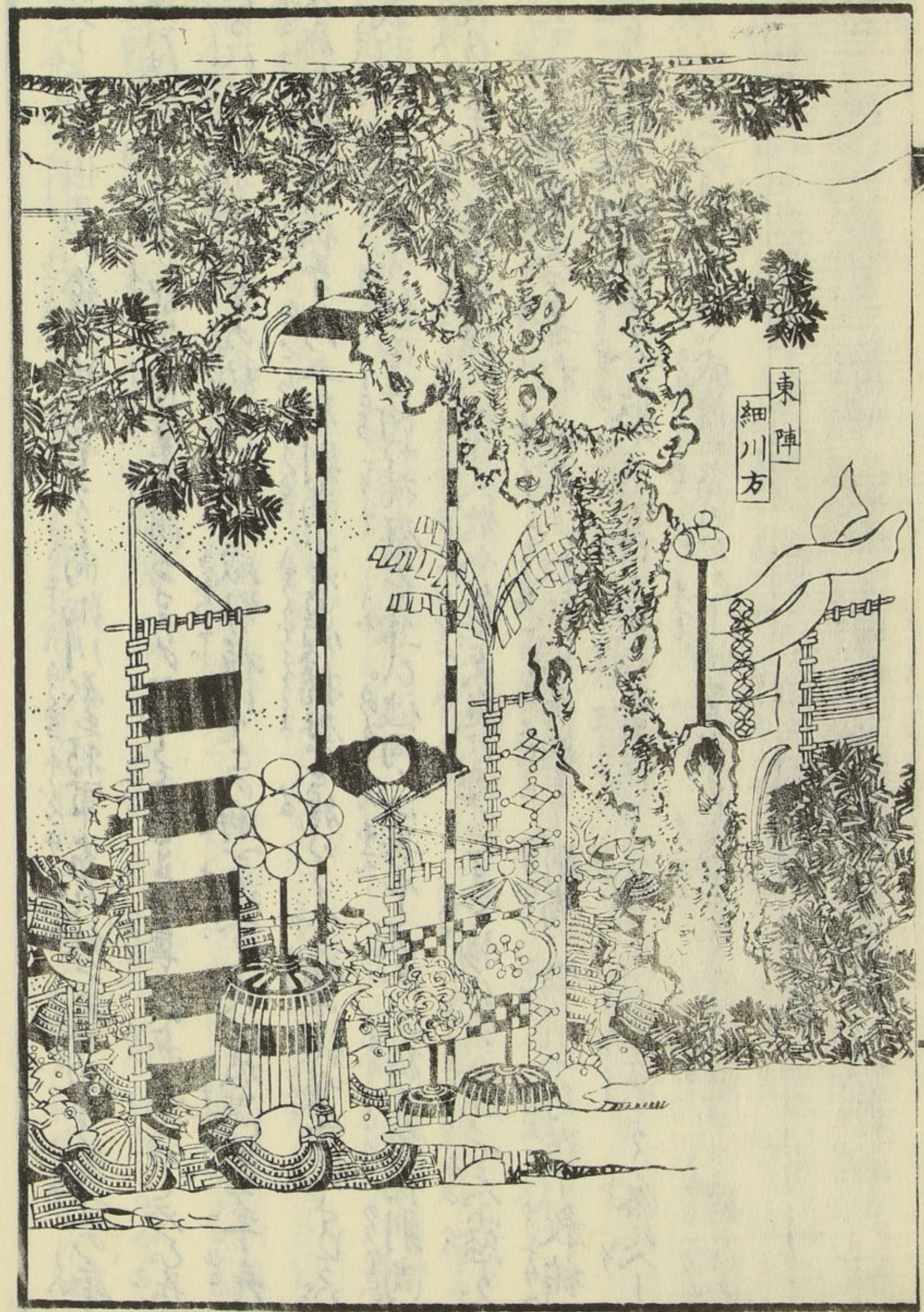
西陳
山名方

應仁の乱
東西の
對陣の
圖

百將傳
一
卷
一
百
一
十
一
頁

五五

群
五
堂
藏
友



東陣
細川方

百將傳
一
卷
一
百
一
十
一
頁

群
五
堂
藏
友

睦也。政長、長統、吉令、今、兵と解して上洛し、將軍に獨して仕けり。かくて實正元
 年九月、白山、長統、將軍の命に違ふてありけり。長政、憤を、伊勢、兵庫、分、版、尾、下
 総て違へ、長統を逐出、長統、陳、謝、するに道多。ま、河、及、の、若、は、不、疎、り。遊、依、を
 憑、て、發、居、せ、り。因、て、政、長、公、然、と、白、山、の、家、跡、を、領、せ、り。長、政、猶、も、怒、り、止、り、政、長
 下、に、長、統、を、遣、付、せ、り。令、せ、り、長、政、長、頼、て、兵、を、率、一、若、は、の、城、を、屠、り、け、り。六
 長、統、嶽、山、の、城、に、入、り、將軍、を、政、再、び、令、し。大、和、山、松、河、内、紀、伊、の、軍、を、以、て、政、長、に、授
 政、長、伴、の、兵、を、領、へ、嶽、山、及、び、金、原、の、堅、を、さ、さ、攻、落、せ、り。長、統、防、守、せ、り。と、然、ん
 吉、野、山、に、逃、奔、す。長、政、猶、も、その、行、方、で、探、さ、む、る、に、終、不、獲、也。因、て、政、長、系、降、不
 帰、ま、り。と、小、宗、令、以、為、か、の、家、の、爭、端、は、その、盪、觴、我、に、在、り。若、は、長、統、不、運、ん、て、
 我、に、に、利、と、是、あ、る、と、も、渠、が、勇、氣、を、用、い、る、更、に、母、弟、の、弱、射、多、く、は、渠、と、我、と、同
 せ、せ、り。徐、中、八、國、は、小、宗、に、次、と、長、統、も、さ、さ、以、為、山、名、が、威、權、總、將、と、壓、し、渠、と、固、ま

後、の、佐、と、あ、ん、と、是、う、く、と、密、に、志、を、上、名、不、通、せ、り。かくて實正五年八月、政、長、を
 以、て、長、頼、と、し、干、法、將軍、を、政、の、素、り、政、務、に、依、り、ひ、辭、職、の、志、あ、り、と、以、て、繼、嗣、を
 き、ま、り、然、止、さ、す。其、の、弟、長、母、と、い、ふ、は、津、守、の、門、主、多、り。脱、に、釋、門、小、入、り
 久、と、遂、に、還、俗、あ、り、と、天下、で、讓、と、り、ん、と、その、事、を、若、ら、る、義、母、の、時、て、後、の、愛、美、
 申、入、れ、と、憚、り、を、固、く、辭、と、り、ひ、く、と、長、政、重、祿、を、宣、ふ、や、ら。後、我、り、子、を、生、し、も、祿、祿、と
 脱、に、沙、門、と、し、家、跡、に、違、ふ、あ、ら、う、と、堅、く、誓、ひ、ひ、り、く、長、母、是、より、還、俗、を、
 名、を、長、統、と、更、めて、今、出、川、殿、と、号、し、細、川、勝、元、と、り、て、執、事、と、あ、せ、り。かくて實正六年
 十月、長、政、の、所、養、孫、富、子、平、在、あ、つ、て、男、子、を、生、り、長、政、大、に、悦、び、ひ、祿、祿、を、脱、公、之、
 ぶ、も、愛、に、溺、れ、入、り、更、に、沙、門、と、し、ひ、の、愛、を、富、子、も、又、初、子、多、り、傍、と、り、ま、と、深、く、厚、く、ひ、屋、是
 を、悲、歎、す、と、も、多、復、に、誓、ひ、一、前、言、と、愧、て、將軍、更、不、釋、と、果、さ、す。富、子、の、弟、の、續、
 身、親、と、不、書、と、し、名、宗、令、に、遣、し、我、適、男、子、と、海、を、り、釋、門、小、入、候、に、悲、び、と、固、て、是

室町殿に逢奉り。細川勝元自山政長と殺さんと請ふ。將軍とて辨し。おのれは後親で
 使を遣せ。勝元に謂ふ。宗全が威君を凌ぐ。政長と親ま。必不虞のて。おん今より
 集と交り。と。安泰を圖る。と。勝元は。武士の本意。おのれと。從ふ。再び細川教春
 と。法で。諭さ。おのれ及び勝元止。海は。と。不從ふ。おのれ。政長。助。英。ひ。給。方。時。小
 宗全。上皇。迫り。政長。追討。院宣。を。言。下。と。義統。に。告。義統。被。兵。で。率。き。政長
 と。所。靈。表。不。開。致。小。及。ひ。ける。政長。敢。く。ち。り。負。て。何。方。と。も。多。く。逃。亡。は
 按。る。に。後。太平。記。の。祝。大。小。相。違。せ。り。政長。前。小。管。領。に。任。じ。每。年。正。月。二。日。の。時。の
 管。領。統。領。で。進。め。奉。は。先。例。と。す。び。の。奉。應。仁。正。月。改。め。て。上。意。を。伺。ふ。及。む。と。政
 長。是。と。後。つ。る。に。暴。に。渡。河。お。す。き。南。上。意。下。つ。る。大。小。旗。ま。違。ハ。何。の。劫。を。ぞ。や。と
 率。ひ。け。ち。り。の。り。入。り。も。も。下。流。氷。と。凍。び。ひ。て。多。と。終。る。小。程。多。く。畠。山。義。統。管。領。職。小。補。せ。と。け。と。ハ。寂。樂。五
 小。將。發。上。方。里。小。路。の。政長。の。被。父。の。跡。と。す。政長。を。追。落。し。て。領。さ。ん。と。軍。慮。を。廻

ら。い。う。と。は。細川。右。兵。衛。大。夫。勝。元。と。急。ぎ。防。敵。の。備。と。設。け。神。保。宗。左。衛。門。尉。長。藏。小。八
 百。餘。騎。と。す。副。と。系。極。の。被。う。り。佛。陀。寺。ま。で。陳。と。張。り。方。里。小。路。の。細。川。方。の。援。兵。と
 共。小。堅。固。に。備。と。て。敵。と。俟。つ。然。に。勅。使。參。後。隆。昌。幕。府。の。出。使。少。伴。勢。右。兵。衛。亮
 貞。遠。細。川。山。名。の。兩。家。入。來。を。接。判。止。め。け。と。す。得。暴。を。承。る。宗。全。も。然。止。か。こ
 と。之。傾。度。し。門。外。小。さ。る。所。の。幡。と。擗。ま。き。靜。ま。と。す。勝。元。が。援。兵。も。方。里。小。路。で。門
 拂。ふ。政長。助。力。を。失。ふ。所。小。義。統。が。勢。甚。ま。り。神。保。と。追。前。に。神。保。被。殺。に。敗。れ。と。す。ま
 政長。も。ち。負。て。系。極。の。夫。舎。の。前。に。弓。杖。突。て。大。音。の。り。小。系。極。方。の。人。も。自。山。左
 衛。門。督。政長。唯。今。我。の。勞。と。て。門。前。小。戸。を。曝。ひ。り。に。面。を。被。さ。し。道。と。知ら。ず
 討。出。急。難。と。助。よ。う。と。叫。び。り。と。門。を。閉。て。も。も。せ。と。圍。て。政長。於。方。多。く。遠。く。逃
 亡。せ。し。後。何。若。う。と。け。り。と。す。本。湯。の。身。に。細。川。の。流。れ。に。ま。ぎ。て。濱。く。も。若。と。流。け。り。故
 と。と。書。け。り。故。小。將。日。ま。も。細。川。系。極。上。と。急。と。據。め。政長。と。一。味。せ。り。所。小。今。日。ハ

後理の心を引給へ門前我の滅政長と人捨ること比真の振舞ふ。一人の指矢に
 こそ落しける系極門の扉に何若く書けるへつとくも系極結のお茶壺にむくはつ
 とね後理ぢやりのうら云云去る正月十八日兩畠山雌雄の場になつて系極細川が天下の潮
 時を受けあふの指矢と得とつとて諸侯の交り既にして強勢の力とありぬ此上六
 遺恨の情と困て念極の辱と雪んと後一けと六一家類棄るの多小同。晝夜軍の
 評定と決しける云云。是より勝元徳吉の軍勢と暮はと裁と。但本朝通記四史各表
 ある処の宗令 天皇方び 上皇を室町の堂中に請ひ推して院宣とて一とて裁は蓋
 梳飯のと此にあり。その是よりてのまきと知は次

かくて勝元畠山政長を救はんとて私必ひ。宗令後統が威を慮とを憤り兵を
 起してとて壓入と。その門族及び斯波系極赤松武田富樫公等。その餘吉良仁木本橋
 ありぬの兵と帥は洛小入て勝元に黨は都て軍勢十六万人系中に先満と。山本宗令

こと成てその後より此方にも疾勢と集りよとて廻文をあげける山本一族のいふ及び
 新田將畠山政長一色主波六角大内河野の二族吉良長孫仁木教光等と指し。系帥
 小集する兵十万人勝元東に陳し。宗令西に陳し。互に牛角の威勢と漲る。あふ放て
 洛中の貴族老若衆を失ふの事叫ぶ。街小亮也。猪助大とあり。さうけとて今出川殿
 えさる思ひひ躬に石細川に陳に臻りて論し。さう海に懸きとてや兩陣まづ柵と固き
 兵衛と緩らむ。あふ赤松守政則勝元の陳にありける。勝元私に拒まるといふ。や
 とも播及の西玉の通路。要津の地とのみ。んと系帥は兵と起せり。まづ播及とて糧
 道と海とまづ大功更なるさう。んが則先祖の地と。今軍勢系に集まり。晝夜軍の
 にかしとてとて対て。あふ政則大に拒む兵と率と播及に入るといふ。放て。後路若僧
 明石白旗木の救極成とて。まづ降る。干戈を動かして。一國平表。政則進之備
 前の國を。を操むる。ことまづ。頼隆と。政則大に威と。後播備兩及の兵と



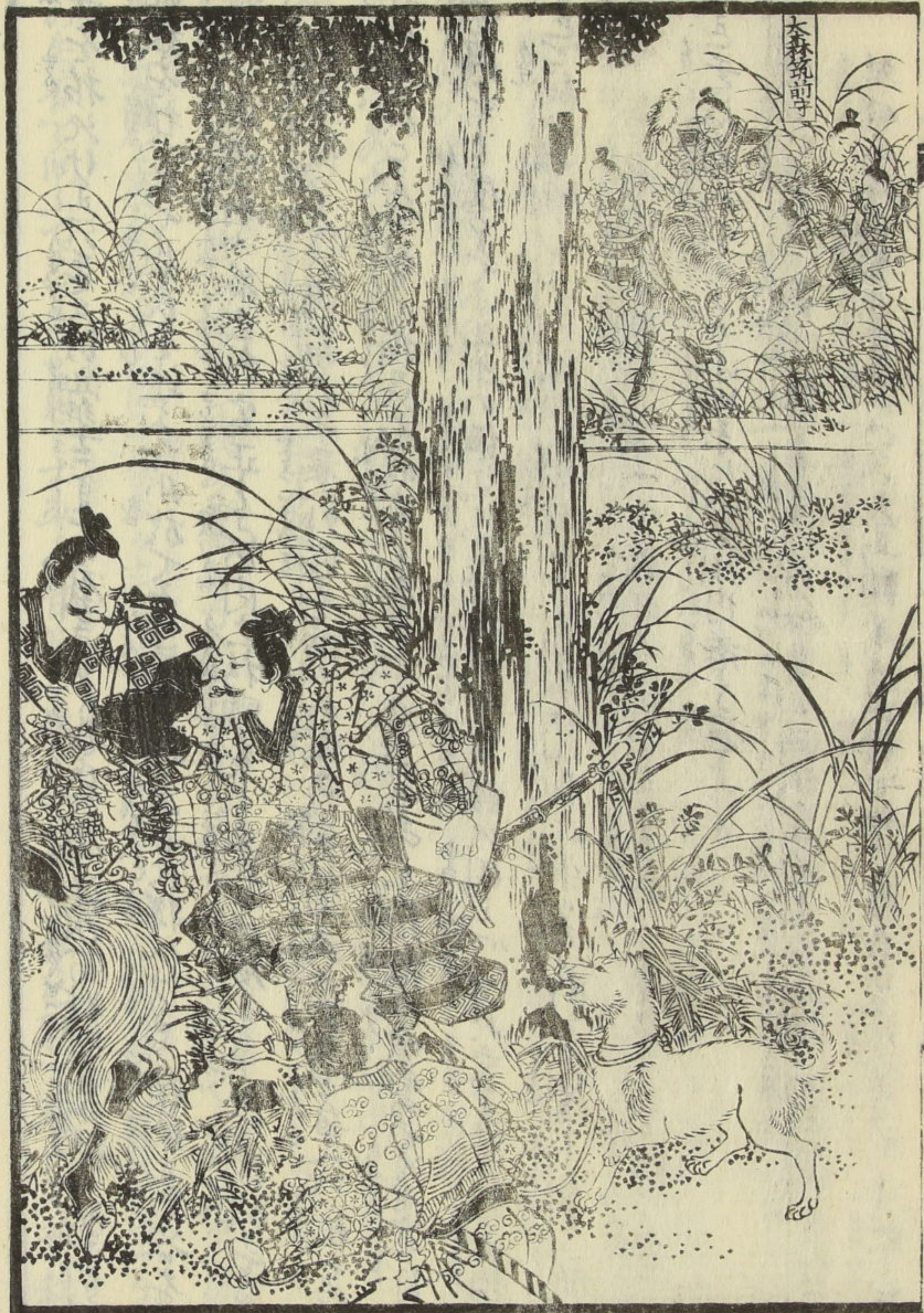
五條早雲

早雲狩獵小
假託て
大森筑前が
小田原の
城を取居

百將傳一死語卷之十一

〇三

群玉堂藏板



本林筑前守

百將傳一死語卷之十一

群玉堂藏板

藏人助而人を殺しけり。家桓忽比礼とて。家齊らんとて。時を得ずと。款
 びて宗佐の隨兵五百餘騎兵にけり。宗佐、潁州清水港より。豆及松崎、松崎を
 名、黄泚川をうら渡り、松崎の所新に推考す。折し四月五日、右左兵衛督
 政知の弟之面忌に書はせりて。僧で請下。靈魂成併の根器を盡し。修行半ありり。
 如許、と注進あり。六僧侶の衣と脱で大庭に發ぎ。士卒の長袴と著る。躍出てを
 下へと強功の殊にその勢百騎に足らぬ。防守の便術で失ひて。忽比滅亡に及びり。
 長氏こそ不入り判れとて。民と抹むると。禁め。貪と極と孤絶と憐とけり。巴
 長氏大小敵びて。親附するも父母の如く。まご玉中の武士こそ降はこ。不放て新九
 永長氏、豆及小威を卷ひ懸て。名字と引替へ北條と改む。と後太平記二十五小見
 え。まご同書に明應二年極月廿八日。八千餘騎を率て北條と改む。五相及小田原へ
 押する。城より大森筑前守実頼、戦年の残ひに兵力の瘦とる。小必ひ由より。

此敵不攻つげり。と敵に敗を。実頼妻子徒類と共小。武務の方へ落て。中夫より
 長氏この城入り。大小勇威を輝とて。とをえり。然るに本文の所と。その社き
 同ト。く。但北條五代記にも。城の山所と責て。豆及平均する。と我より
 加へ早雲威を東及の着ひ。而上杉と滅し。關八州と畧せんと。然るに上杉羽真の
 所。浦道守易勝の墨小在り。早雲まづその枝を去り。以てその根を枯さんと。道すと
 争ふ。既に戦ふに及びける。道すと兵制に達し。その子荒次。弟友意。父万夫。不妻の勇あ
 つて。防守の術と事し。けり。早雲も攻案飽ある。とともその威勢更に教する。と松火
 易勝の墨を遺き。荒井の城に送りける。一尺新井。早雲統て。ことと圍めど。毎夜及之。易
 敵小死傷の老寡も。早雲遠小。故とて。家令と下と。攻急と禁下。城を圍て
 糧道を絶つ。あ。不放て。城中困。牛馬と割て。食ふ。不至。時大森城。後守。道す。れ。對
 ひ。その。城中の糧。既に。竭て。兵卒の。意氣。殆減。故に。一旦。城と。遺き。松及に。落て。及。意

の泰し麻呂谷上總分力称を憑に武刃及び下野の兵を募りて北條を討つ。この致
 辱と雪ぐに若しと諫めつけよと浦道守大少は討つての事なり我早雲と兵と手ひ
 或ひの言馳成ひの輪は然とど由二度壘を落さる。こと味界の極るきさうねい天殊輪と
 未さるあり。如何小とあるとびその始めと浦高子あきふより我と奮つて嗣子とせり。然る
 久時高実子と殺く固て我と疎んざり我難の臻えと忍と盤と削て傷とあり。相又絶世さ
 の洗弁とある然るに家は時高の事なりとて樂まを我を追来つて辱するにあり。家
 長と計り及父に報きことと我と自五せり。ささび罪と天に復てことと購ふ所あり。
 こととの故に死る人の。卿を城を逃げよとの衆人して君就公命とまふ不瀆さんと以ん
 ら何方より行へ。と死を誓て城を守と。早雲が兵機を計り。城附して攻ると急之時に
 城兵舎のさる。月餘及びて塞屋。故にまがり。命絶は道守及玄自殺て。城既
 不瀆けと。上杉威力信長(北條が威日に熾なり)

按るに傳にのり。浦荒次郎義意燈の平氏之浦文明の後胤也。相模守之浦の
 伯人陸奥守從四位下。後同入道道守の子と杉修理大夫朝興の麾下とて北條
 早雲と挑と我の同。新井の故に終は。永正十五年七月十五日。城中糧竭て二千餘
 誘討出て力減ひ。大お道守自害とる。義意時年二十歳。身長七尺五寸。く。眼の
 鈴のく。力量八十五人。對ひ。又二尺の程の棒八角。く。鐵を捲く。ことと揮と。麻鼓
 のく。故五百餘人を殺す。自首と捨落して死に。軍兵忠怖せよ。いあり。故ことと
 梟首とる。二奉に及びて。眼先の八方と睨む。如し。早雲ことと怪之。傳をして供
 せよ。と。小放て。絶世寺。道守。義意。の。神降首の傍に。性て。和歌を。録ひ
 う。は。い。も。愛。と。も。考。ら。ぬ。一。紙。つ。り。浮。世。の。傳。を。唱。不。れ。や。其。の。首。忽。地。眼。と
 塞。む。手。後。か。の。死。地。方。殺。す。大。馬。除。て。至。ら。ん。と。云。

廿九北條五代紀假字本の永正十五戊寅七月十日とせり。其の孰とあるとあり。此
 かて早雲の永正十六年秋八月卒をせり。又北條早雲の家系小松内大及重盛より
 十五六代及ぶ。結書にんて疑ひ多し。其の父祖の名字し。早雲が所
 録して結書にあり。北條五代紀の未だ將軍家公達早雲を慈へ一時神の
 想に因て停勢停勢守氏貞と曰。既近に定めし夫より其子孫を思ひて氏貞
 の女とて今川五郎氏親の嫁に氏貞の子源河も照康。その子太郎貞次二男新九郎
 氏茂なり。將軍他界の後新九郎氏茂系と去て今川に拠る氏親の婿なり。結
 氏茂を旁りて高きもの星と守らる。今初め記す家系に栗系氏が若の甘願
 仁武鑑にわりの夫他と相違せり。五代紀の早雲が祖父氏貞との名をえど
 まる父の名も差ひたり。然しとも彼選考にかつるのるれ精一と波バ拠あるとあり。

三好長慶

人皇百七代 正親町帝 永祿七年卒
 今安政三辰迄二百九十三年 成

三好長慶者萬松院之時擊殺同族

宗三而後入京侮武將茂管領其威

權赫乎一時其子義繼遂殺義輝而

足利氏亡

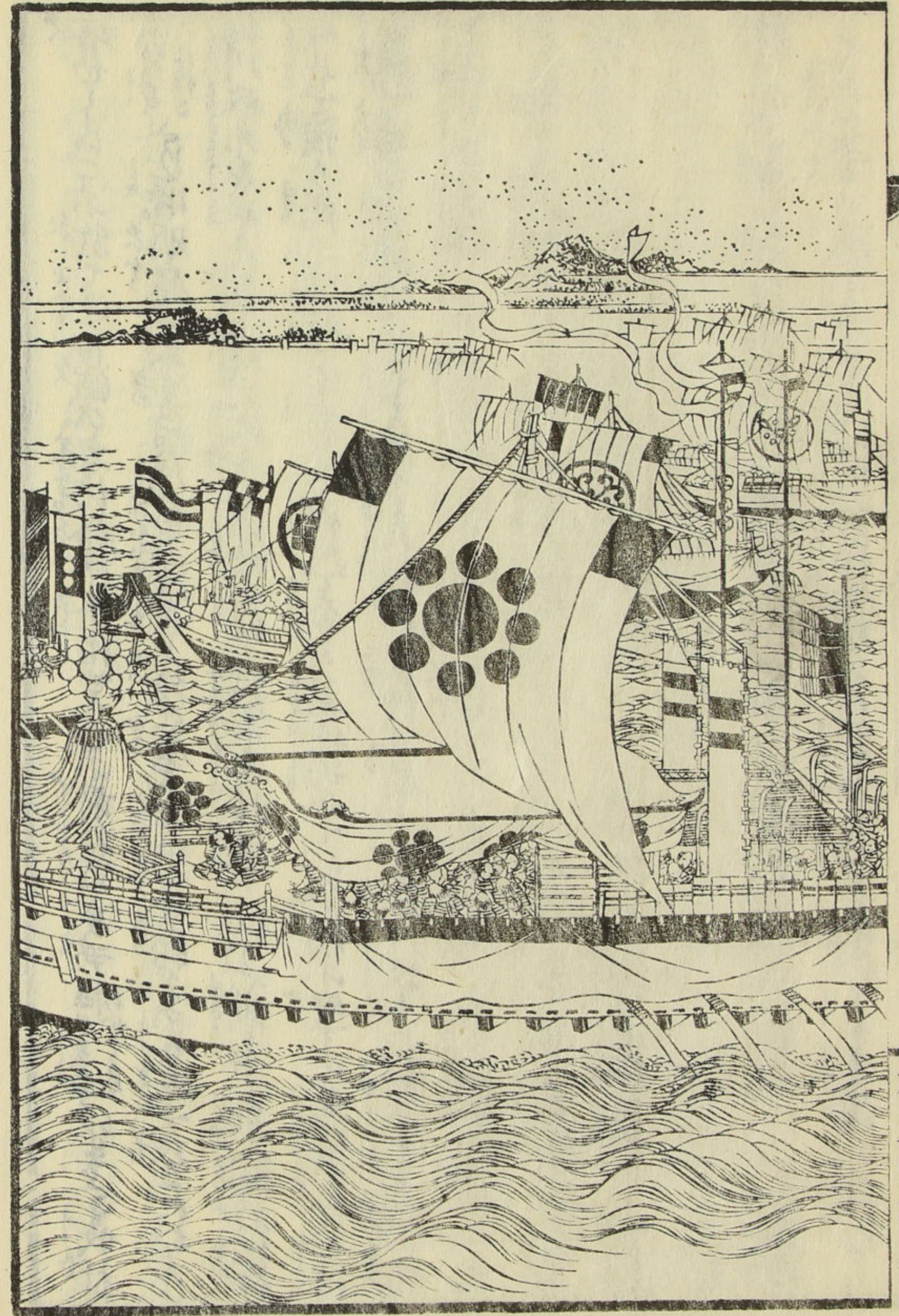
新羅三郎義光
 喬信濃源氏小笠
 原二族分テ河波
 三好トス同國三好
 二住スルヲ以テ氏トス
 長輝 筑前守
 長基 筑前守
 義長 筑前守
 義繼 左京大夫
 史十河一存子

細川頼之四國の總轄と多し。其の二族とに應。其の任。細川政
 元の世に及び。三好筑前守長輝。一不元。香西又六元。近の兩人。家幸と得て権。一專
 一。竟に政元が継子のて。因て又六子の主政元を殺せり。

細川氏綱
 長慶と計
 大兵と率
 京師小
 攻入

百廿傳一交諸卷之十一

〇此八



百廿傳一交諸卷之十一

君

永弾正久秀と住め。その此の抄津へ取りける。再説その翌天文十九年。その好まき兵を率
 き。抄津より入て火を縦ち。天津松本に至る小より。晴元が家人出張り。是と拒げど敵
 敗をく板本に帰る。長慶とまより威で逞志じ。系洛中の民家より。地子後と納む。細川次郎氏綱と右京大夫
 同干年正月。將軍兼孫之好名が威で思と経を遊人なる。細川次郎氏綱と右京大夫
 小住と。管領の職に居るあんと。因て將軍家も係系あり。然るに氏綱若年にて。この
 大任に居るといふ。虚勢と擁するの。長慶府親の事と督し。威を我内南海に養
 ふ。前管領晴元は北堅固に在ける。是を破て大小軟き。かる及も後の世に在て更なる
 甲斐と。利勢深衣の容となつて。堅固の山舎に世と通は。是より松永久秀
 が族洛に在て洛民を採め。まに柳營と茂に。その酷暴殘忍なる。勝て等ふべし。まに
 將軍兼孫と。怒へ前管領晴元が堅固の草原に使者を遣し。松永が遣と厭ふ。以
 晴元固辞する。と。得に系師に未り。と。糾ひ長慶を憤り。河内の兵三二万を

率ひ。入洛し。久秀が孫の雅と遊人なる。系師と固き。丹波の群。長慶並に入洛
 へ。晴元と橋。芥川に遊く。孫忽地羽翼を失ひ。まに長慶と和平し。系師に
 帰り入る。ぬれ。まに長慶が威宇宙と。覆ひ家人松永久秀も。窮小終り。威小。孫は
 老て。民人を苦む。圓干二年に至り。孫孫律と。輝と。及び。この頃天下。兵戈さ。小
 止む。時多。まに。我内南海の。好修理大夫長慶及び。その。松永。晴元。思久秀。暴に。逆
 てる。まに。織田氏。長威を。孫。小。今川。久元。の。遠。の。地。と。相。甲。信。の。同。武。固。信。言
 跋扈する。北條氏。藤。八。及び。横。行。佐。竹。重。重。の。事。陸。に。在。て。岩。城。を。孫。め。道。志。と。龍。以
 華。名。登。隆。の。金。澤。と。領。し。長。尾。景。虎。の。敵。後。に。記。り。て。慶。長。東。甲。信。と。孫。の。朝。金。景。景。の
 敵。前。と。守。り。畠。山。の。黨。の。河。内。社。堂。の。両。方。に。相。分。と。陶。全。美。晴。の。周。防。長。門。と。澄。有。し。毛
 利。元。就。の。安。芸。の。堀。記。し。元。子。晴。久。の。出。雲。に。在。て。隱。石。伯。父。の。地。と。畧。し。大。友。宗。麟。を。豊
 後。に。據。り。龍。造。と。隆。信。の。肥。前。島。津。及。久。の。薩。摩。小。在。り。その。餘。黨。と。樹。て。兵。と。聚。つ。州

